

平成21年 5月29日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520189
 研究課題名（和文） 書き出しと作中人物導入手法の研究：1880年代スペイン小説における変容過程の分析
 研究課題名（英文） Examination into the Novelistic Incipit and How to Introduce Characters: analysis of their transformative process in the 1880's Spanish Novels
 研究代表者
 大楠 栄三（OGUSU EIZO）
 静岡県立大学・国際関係学部・准教授
 研究者番号：80315853

研究成果の概要：エミリア・パルド＝バサン（1851-1921）の初期小説において、書き出しで主人公を読み手にとって「未知」の存在と想定して導入し、紹介の儀式を経て名指しする手法が規範化した後、「既知」と想定した呼び名へと変容、次にいきなり名指しする手法へと転回し、主人公「わたし」の語りに帰着すること。書き出しの描写は、作中人物を含む空間の一般的な描写から、人物を含まない純粋な風景描写、そして冒頭一行目に導入された主人公の行為や感覚に焦点を当てたものへと変容し、「わたし」の気まぐれな語りにいたること。これら2つの現象が密接な関係にあり、当時の読者の美的感性とそれを基盤とする物語情報の制御の仕方とリンクしていることを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	900,000	0	900,000
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,300,000	450,000	3,750,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：スペイン文学，小説，19世紀，書き出し，作中人物，描写，風景

1. 研究開始当初の背景

(1) "incipit"という日本語になりにくい言葉があるが、演劇や映画といった表象芸術において「幕開き」や「オープニング」の重要性に疑問を呈する者はいない。では、文学作品、なかでも、小説という本質的に修辭的な芸術——小説家は読者を自分の想像世界へ引きずり込もうと説得を行わなければならない——にあって、「書き出し」はいかなる意義をもつのか。

書き出しは、小説家が読者を自分の世界へ

引きずり込むために、「何を書くか」だけではなく「どう書くか」という技巧上の諸要素をさまざまな形で絡ませ、凝縮させた場であることは間違いない。さらに、読者を想像世界へ没入させるための説得術が、書き手だけに関わる事象でないことも明らかだ。そこには、読み手の好みや想像力といった感性が関与するはずである。ということは、書き出しに潜む種々の技巧が必然的に、一定の時代の一定の社会において支配的だった審美的感性を反映しているといっても過言ではない

だろう。

小説の書き出しが内包するレトリックとその歴史性、社会性に着目し、人びとの感性が劇的な変容を遂げ、それに連動して新メディアの普及と発明が相次いだ 19 世紀後半のヨーロッパ、とくに専門とする 1880 年代のスペイン小説に焦点を当て、書き出しの考察を進めた。

(2) 小説を創作する側からの、書き出しの重要性を指摘する声は枚挙にいとまがないにもかかわらず、スペイン文学はもとより広くヨーロッパ文学、ひいては日本文学においてすら、小説の「書き出し」を歴史的に考察した研究が皆無だというのが研究を進める動機となった。

2. 研究の目的

主に物語論的アプローチによって「書き出し」という特権的な場に顕在化してくるテキスト内在的な特徴が、一定の時代の一定の社会（読者集団の感性）によって、作家個人の自由な想像力に制限が加えられた結果であること。すなわち、「書き出し」の歴史性・社会性を明らかにするため、1880 年代のスペイン小説において以下の問題の解明にあたった——

(1) 「書き出し」にどのような変容が生じたのか？

(2) 転回点はいつ頃に位置するのか？

(3) 変容が生じた社会史・文化史的な要因は？

(4) この転回は同時期の欧米に誕生した「新しい読者」、その想像力の帰結と捉えることができ、彼らは印象主義絵画を享受した後、19 世紀のヨーロッパで一世を風靡した「パノラマ」装置に退屈を覚えはじめ、発明間近の映画の観客となる人びとである。よって、以上の考察結果をもとに、表象ジャンルを超えて生じた感性の変容を立証する。

3. 研究の方法

上記の問題に対する答えを、スペイン小説の伝統と同時代のヨーロッパ小説、ならびに視覚芸術・装置といった文学・文化史的コンテキストという側面から探るため、エミリア・パルド＝バサン（1851-1921）の初期小説に焦点を絞り時系列にそって考察を進めた。その上で、彼女と同時代のスペイン作家、ペレス＝ガルドス（1843-1920）、クラリン（1852-1901）、ペレーダ（1833-1906）の小説の分析結果を横軸において比較参照するという方法を取った。パルド＝バサンに焦点を当てた理由は——

(1) 定期的な小説執筆

1879 年の処女小説『パスクアル・ロペス』以後、1886 年の第 5 作『ウリョーアの館』をへて第 7 作『日射病』（1889）にいたるまで 10 年間にわたってコンスタントに小説を著しており、彼女の作品のなかで 80 年代における書き出しの変容を時間軸に沿って網羅的に考察することが可能。

(2) 同時代ヨーロッパ文壇とのコンタクト

大学にも行けず文壇との付き合いも皆無という社会的状況のなかスペイン小説の伝統を受け継ぎ、次に裕福な貴族であることから頻繁に外遊し同時代のヨーロッパ（とくにフランスの作家たち）と密接に接触、さらに、そこで吸収したものをスペインで発表しつつ同時代のスペイン作家たちとの交際を広げ、作家として成長し変容を遂げていく。こういった「学習歴」を『自伝ノート』（1886）や書簡などから逐次追うことが可能。

(3) 最近の再評価

パルド＝バサン、とくに 80 年代の彼女の位置づけをめぐって、生誕 150 周年（2001 年）を契機に数多くの研究がなされ、再評価が進み、彼女の著作や書簡、研究の出版が相次いでいるからである。

4. 研究成果

(1) 作中人物の小説世界への導入と名指し

タイトル	導入時の指し方
1. <i>Pascual</i> (1879)	“yo”「わたし」→“Pascual López”
2. <i>Viaje</i> (1881)	“los desposados”「その新婚夫婦」
3. <i>Tribuna</i> (1883)	“una mozuela”「一人の女の子」
4. <i>Cisne</i> (1885)	“un hombre”「一人の男」
5. <i>Pazos</i> (1886)	“el jinete”「その騎乗者」
6. <i>Madre</i> (1887)	“la pareja”「その二人」
7. <i>Insolación</i> (1889)	“Asís Taboada”（固有名）
8. <i>Morriña</i> (1889)	“doña Aurora Nogueira de Pardiñas”, “su único hijo Rogelio”（固有名）
9. <i>Cristiana</i> (1890)	“yo”「わたし」→“Salustio”
10. <i>Solterón</i> (1896)	“yo”「わたし」→“Mauros”

① 姓名を使って名指し

パルド＝バサンの処女小説『パスクアル・ロペス：ある医学生の日記』*Pascual López*（1879）に関して、作家みずから執筆時に模倣に努めたと公言しているピカレスク小説の代表作 2 作品『ラサリーリョ・デ・トル

メスの生涯』(1554?)と『ペてん師ドン・パブrosの生涯』(執筆1604?, 出版1626)との比較により、両ピカレスク小説とは異なり作中人物が必ず姓名によって名指しされていること、姓名が社会的身分や職業に代わり作中人物のアイデンティティーを保証する呼称となっていることを明らかにした。

②「導入・名指しシステムA」の確立：「外的焦点化」→「二重の未知」で導入→「紹介の儀式」→「二重の未知」の解消＝名指し

第1作『バスクアル』から第2作『新婚旅行』*Un viaje de novios* (1881)と第3作『女弁士』*La Tribuna* (1883)を経て第4作『ピラモルタの白鳥』*El Cisne de Vilamorta* (1885)にかけて、主要な作中人物が小説世界に導入されてから姓名で名指しされるまでのプロセスがシステム化されていったことを明らかにした。

主人公たちは、まず第一に、読み手と語り手にとって未知の人物、すなわち「二重の未知」の存在として小説世界に導入される。視覚的(見える)・聴覚的(聞こえる)情報のみが呈示される「外的焦点化」という情報の制限を受けた言説のなか、作中人物たちは無名の人物として存在することになる。

ところが、作中人物が遂行した発話(呼び掛けや自己紹介といった「紹介の儀式」)を通して固有名が明かされると、語り手によってただちにその固有名を使って指し示される(「二重の未知」の解消＝名指し)。これ以後、同じ呼称で絶えず指し示され続けるというものである。

③「導入・名指しシステムA」のアレンジ

パルド＝バサンの代表作といえる第5作『ウリョーアの館』*Los Pazos de Ulloa* (1886)では、書き出し1行目に主要な作中人物がいきなり定冠詞を付されて導入される(「その騎乗者」"el jinete")。続篇の第6作『母なる自然』*La madre Naturaleza* (1887)でも、主人公となる「二人」は書き出し第2段落1行目に、同じく定冠詞を付されて導入されている(「その二人」"la pareja")。

ただし、これらの作中人物たちは外的焦点化的な情報制禦のもと、自己紹介や他の作中人物による呼び掛けといった発話をとおして固有名が明かされ、語り手によって名指しされ始める。つまり、上記の「導入・名指しシステムA」のアレンジだと解することができるだろう。

④「導入・名指しシステムB」の試行：「内的焦点化」→焦点人物による導入→「紹介の儀式」→名指し

第5作『ウリョーアの館』と第6作『母なる自然』の書き出しでは、定冠詞を付されて

導入された作中人物たち(「その騎乗者」と「その二人」)の姓名をはじめとするアイデンティティーが不明のまま、彼らが知覚し認識することが可能な情報のみが呈示され始める。こうして「騎乗者」と「二人」が焦点人物となる「内的焦点化」された言説のなか、他の主要な作中人物たちは彼らの知覚を介して小説世界に導入され、彼らが抱くイメージのまま存在し始める。

「騎乗者」と「二人」は、例えば、他の作中人物が遂行した発話(「紹介の儀式」)をとおして初対面の人物の固有名を知覚し認識する。そして語り手は、彼ら焦点人物の知覚・認識を「語り」に反映させるかのように、同じ固有名を使ってその作中人物たちを名指しし始めるのである。

すなわち、定冠詞を付されて導入された「騎乗者」と「二人」は、他の作中人物を導入し名指しする主体として機能していることになる。よって、「定冠詞」は、読み手がその付された作中人物の立場に自己移入し、彼らの知覚を介して小説世界を見据える、すなわち、彼らが焦点人物だと解するよう導く「親密化冠詞」だと理解できるだろう。

⑤いきなり姓名で名指し

第7作『日射病』*Insolación* (1889)において、ヒロインは書き出し1行目から固有名「アシス・タボアーダ」"Asís Taboada"と名指しされる。これはパルド＝バサンの小説史上、初めての現象である。しかも、正式の洗礼名「フランシスカ・デ・アシス」"Francisca de Asís"ではなく、省略形「アシス」"Asís"という愛称を使って名指しされている。もちろん、固有名が小説冒頭から明らかな以上、ヒロインについて「紹介の儀式」は存在しない。

他方、他の2人の主要な作中人物(Gabriel Pardo, Diego Pacheco)に関しては、ヒロイン「アシス・タボアーダ」が彼らを導入し名指しする主体となる。つまり、「導入・名指しシステムB」が採られていると解することができる。

第8作『郷愁』*Morriña* (1889)でも同じく、主要な作中人物2人は書き出し1行目からいきなり固有名で、今回はフルネーム「アウロラ・ノゲイラ・デ・パルディニャス」"doña Aurora Nogueira de Pardiñas"と「彼女の一人息子ロヘリオ」"su único hijo Rogelio"と名指しされる。もう1人の主要な人物(Esclavitud)の場合は、「導入と名指しシステムB」に則り、ロヘリオが導入し名指しする主体となる。

⑥「わたし」の固有名が他者の発話の中で

第9作『キリスト教徒の女』*Una cristiana* (1890)以後の作品では、書き出しから主人公の「わたし」が語り手として登場する(いわゆる「一人称小説」である)ため、作中人

物の導入を問題にすることは無意味となる。
語り手「わたし」の固有名に関しては共通して、物語が展開するなか、他の作中人物が遂行した（と「わたし」が知覚する）発話の中で読み手に明かされる。ただし、作中人物の「わたし」がすべての知覚と語りの主体となっている以上、読み手は「わたし」の固有名という情報の真偽について確証を持ってないことになる。

	導入と名指しの手法
タイプA	「外的焦点化」→「二重の未知」で導入→「紹介の儀式」→名指し
タイプB	「内的焦点化」→定冠詞付き焦点人物による導入→「紹介の儀式」→名指し
タイプC	姓前で名指し→導入・名指しの主体
タイプD	語り手「わたし」→固有名は発話の中で

(2) 書き出しの描写

タイトル	描写
1. <i>Pascual</i> (1879)	「わたし」が学生になるまでの経緯を語る
2. <i>Viaje</i> (1881)	車で新婚夫婦を見送る一行の様子
3. <i>Tribuna</i> (1883)	父親が起床し作業を始める様子
4. <i>Cisne</i> (1885)	風景描写：山間の日没
5. <i>Pazos</i> (1886)	騎乗者が馬を操る場面
6. <i>Madre</i> (1887)	風景描写：森の降雨
7. <i>Insolación</i> (1889)	アンスの目覚めと二日酔いの場面
8. <i>Morriña</i> (1889)	住居の立地の説明と作中人物のモノローグ
9. <i>Cristiana</i> (1890)	「わたし」がこれまでに勉強した科目について語る
10. <i>Solterón</i> (1896)	「わたし」が自分のあだ名について語る

①描写ナシ：*Pascual López, Una cristiana...*

処女作『パスクアル』と第9作『キリスト教徒』以後の小説において、主人公の「わたし」が、第1作では物語が始まる時点にいたるまでの経緯を、第9作以後の「一人称小説」では「わたし」の気まぐれな関心にもとづき語りはじめるため、描写というものが存在しない。

②作中人物を含む一般的な描写：*Un viaje de novios, La Tribuna*

第2作『新婚旅行』は、主人公となる新婚夫婦を含む見送り客全体の平板な描写で始まり、第3作『女弁士』では、主人公の父親が起き出してきて作業を始めるまでの行為が淡々と描き出されている。

③作中人物に焦点を当てた描写：*Los Pazos de Ulloa, Insolación, Morriña*

第5作『ウリョーアの館』の書き出しでは、作中人物を含む空間の描写が一切なされずに、1行目に導入された作中人物「その騎乗者」が懸命に馬を操っているシーンが描き出される。続いて、この人物について視覚的（見える）・聴覚的（聞こえる）情報のみが呈示され、そのアイデンティティに関する憶測が繰り返されることになる。

第7作『日射病』でも同様に空間の描写が一切なされることなく、女主人公アンス・タバアーダが目覚めた時に知覚した感覚（頭痛や体調）のみが描き出され、その後作中人物たちの外面的な行為（発話を含む）が淡々と描写される。

続く第8作『郷愁』も同様、書き出しに空間描写は一切なく、作中人物アウロラと一人息子ロヘリオの住居の立地（大学の正面）がいきなり語られ、そこから彼女が息子や他の学生、教師を観察する日常が描き出され、続いてアウロラのモノローグが再現される。

④純粋な風景描写：*El Cisne de Vilamorta, La madre Naturaleza*

書き出し第1段落に作中人物がいつさい登場しない、純粋に風景だけが描かれているのが、第4作『ピラモルタの白鳥』と第6作『母なる自然』である。

このような風景描写の導入については、一般的に、中世の概念的な自然観から移り変わって、より現実に即した自然への関心（自然主義など）が芽生えてきたことを反映する現象であると理解され、近代に向かう人間精神の発展を示すエピソードの一つとして語られてしまうことが多い。

しかし、まず第一に当時、自然への関心があったとしても、それが何を契機にしていたかということに改めて問いかけるべきである。まったく自律的でニュートラルな自然への関心などというものがあろうのか疑うべきだろう。

『白鳥』では、主人公が山間の落日を愛でる感性をもつ詩人だという人物設定を導くための、ロマン主義的な風景描写のパロディとなっている。すなわち、その動機は、自然に対する関心よりも、プロットによる要請だと考えられる。

『母なる自然』の森の降雨の場合は、旧約聖書の『創世記』に記されているような実りをもたらす豊潤な雨への礼賛を契機とした

描写だと理解できる。

次に、風景描写においては、動機とは別に、その描き方（レトリック）を問題にする必要がある。

『白鳥』では、日没を色彩の並置によって描き出す手法ならびに光を希求している点は、同時代の印象主義絵画につながる感性を読み取れる。さらに、この描写は、時間の経過が刻み込まれた「動く」風景描写となっている。すなわち、日没という一場面（1シーン）が、対象との距離と視角の異なる一連の画像（細かいショット）に分割提示されており、映画というメディアの発明に先立ち小説の中に映画的感性が育まれていたことを示唆するエピソードの一つといっても過言ではない。

他方、『母なる自然』の降雨は、上下二段に区切られ、上方と下方のパートが交互に描き出される描写となっており、そこに視線の連続性を看取できない。すなわち、現実の自然観察とは無関係な描写となっており、同時代に流行していた印象主義的感性を認めることなど到底不可能である。むしろ、この書き出しは、『ダフニスとクロエー』（3世紀）を初めとするギリシア古典の中で規範化されたトポス「悦楽境」"locus amoenus"のレトリックに基盤をおく描写となっている。これはスペインを含む19世紀ヨーロッパにおけるギリシア・ローマ古典学の流行への興味を契機としたものと理解することができるだろう。また同時に、パロディをねらった引用（模倣）、すなわち小説の主題による要請とも解釈できる。

風景描写の場合、自然をじかに反映するのではなく、すでに先行して存在している風景描写の引用である可能性をつねに意識しておく必要があるといえる。

(3) 成果の国内外におけるインパクト

研究期間中、研究成果を国内では毎年東京スペイン語文学研究会ならびに日本イスパニヤ学会大会で口頭発表し、学会誌や紀要において公刊したが、その際に多くの研究者たちからさまざまな感想ならびに助言をいただいた。国外では「19世紀スペイン文学会」"Sociedad de Literatura Española del Siglo XIX"（役員高齢のため2002年以來討論会が開催されていない）のメンバー各員と交流の際、同様の反応を受けた。主なものをまとめると

- ① 小説の書き出しの研究は極めて新奇で斬新なテーマである。
- ② 変容が生じた要因にこだわるよりも、テキスト上の事象を記述することに専念すべきである。
- ③ 書き出しと作品全体、あるいは終行との関係性（物語論的あるいはテーマ論的）にも

注目すべきである。

④ 書き出しで主人公を「未知」の存在と想定して導入し紹介の儀式を経て名指しする手法は、19世紀後半の小説に固有のもの、つまり文学史上目新しいものではない。中世のロマンセやセルバンテスの『模範小説集』にもすでに見受けられるのではないか。

(4) 今後の展望

① 「未知の導入」の起源

1880年代前半のスペイン小説において遍在して観察される書き出しの一定の形式（タイプAと呼ぶ）のまさに「始まり」を、スペイン文学史上に探りたい。この研究によって、タイプAを構成する要素の固有性を明らかにすることができはずである。

② 「既知の導入」の変容

1880年代中葉に出現したかと思うと、たちまちにして遍在した「新しい」形式の書き出し（タイプB・C）が、世紀末を挟む芸術・文学のさまざまな新潮流が噴出し映画という新メディアが普及した時代の中で、タイプDへと変容していくプロセスを詳述したい。この第二の考察によって、われわれは近代という時代が小説の書き出しに落とした影—テキストの曖昧性や懐疑性を暗示するもの—を確認できるはずである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 大楠栄三「自然主義小説？ パルド＝バサン『母なる自然』（1887）—書き出し風景描写のレトリック—」『国際関係・比較文化研究』第8巻1号、2009年（投稿済み）、査読無し。
- ② 大楠栄三「作中人物の導入と名指し—パルド＝バサンの初期小説（1879—1889）において—（第二部：Los Pazos de Ulloa [1886]）」、『国際関係・比較文化研究』第7巻1号、49～99頁、2008年、査読無し。
- ③ 大楠栄三「作中人物の名指し—パルド＝バサンの初期小説（1879—1889）において—（第一部）」、『国際関係・比較文化研究』第6巻2号、17～43頁、2008年、査読無し。
- ④ 大楠栄三「書き出しの風景描写—パルド＝バサンのEl Cisne de Vilamorta再考—」『HISPANICA』第50号、135～156頁、2006年、査読有り。
- ⑤ 大楠栄三「『名指し』の儀式化—『パスクアル・ロペス』とピカレスク小説の書き出し—」『国際関係・比較文化研究』第4巻1号、21～68頁、2005年、査読無し。

〔学会発表〕（計6件）

- ① 大楠栄三「語りのモデルへの革新的・実験的な揺さぶりーパルド＝バサン *Insolación* (1889)の書き出しー」, 日本イスパニヤ学会第 53 回大会, 2007 年 10 月 27 日, 清泉女子大学。
- ② 大楠栄三「パルド＝バサンの転回ー『日射病』(1889) の書き出しー」, 東京スペイン語文学研究会第 126 回, 2007 年 9 月 22 日, 東京大学駒場。
- ③ 大楠栄三「パルド＝バサンとクラリンー *La madre Naturaleza*と *La Regenta*の書き出しー」, 日本イスパニヤ学会第 52 回大会, 2006 年 10 月 22 日, 同志社大学。
- ④ 大楠栄三「パルド＝バサンとクラリンー *La madre Naturaleza*と *La Regenta*の書き出しー」東京スペイン語文学研究会第 114 回, 2006 年 10 月 13 日, 東京大学駒場。
- ⑤ 大楠栄三「情景の出現ーパルド＝バサン初期小説の書き出しの考察ー」, 日本イスパニヤ学会第 51 回大会, 2005 年 10 月 9 日, 神田外語大学。
- ⑥ 大楠栄三「情景の出現ーパルド＝バサン初期小説の書き出しの考察ー」東京スペイン語文学研究会第 108 回, 2005 年 9 月 17 日, 東京大学駒場。

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

○取得状況（計 件）

〔その他〕

ホームページを開設し、上記の雑誌論文を公開してい

る：<http://www7b.biglobe.ne.jp/~ogusu/newpage2.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大楠 栄三

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：80315853

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

研究協力者

フランシスコ・カウデッ・ロカ Francisco Caudet

Roca

マドリード自治大学・スペイン文献学科・教授